



特集 林産試験場開設20周年記念

記念行事の あらまし

北海道立林産試験場が昭和25(1950)年8月19日に現在地に開設されてから、今年で満20周年を迎え、これを記念して多彩な行事が展開された。8月27日(木)に拓銀ビルで開かれた記念式典(午前)と記念講演会(午後)を中心に、24日(月)から30日(日)まで1週間にわたって試験場構内の7つの会場で木工機械実演展と、2つの会場で"くらしと木材展"(木質新材と木材化学製品の展示)が、さらに28日(金)にニュー北海ホテルで木工機械公開座談会が開かれ、バラエティに富んだ一大デモンストラーションとなった。なお、開設以来はじめての年史「林産試験場の20年」(B5判、本文185ページ、参考資料107ページ)が刊行された。

これらの行事は、20年の歴史をただ単に喜び祝うためのお祭り騒ぎでもなければ、積み重ねてきた業績を誇示するただだけのものでもない。今日の木材工業界が直面している問題の解決に、いささかなりとも示唆を与え得るものであることと、林産試験場が過去の業績を省察して、将来の発展への途を追求するためのステップとしたいためであった。以下、本号と次号の2回にわたって、その全容をお伝えしたい。

この夏は例年になく猛暑のつづいた夏であったが、その残暑のきびしい8月27日、朝から雨模様のなかを10時02分着の下り急行列車からどっとはきだされた人々や、前夜からすでに市内に宿泊していた人々など、道内外から294人の来賓・招待者が、式典会場の旭川市・拓銀ビル8階大ホールにつめかけるうちに、定刻10時30分開場。まず、「林産試験場の20年」と題するスライドを上映。約30分にわたって、林産試験場の開

設以来20年の経過と業績、現状と将来への展望などを説明したあと、ひきつづき記念式典に移った。

ステージには、感謝状贈呈者と来賓が向って左側に、主催者側から横田副知事、湊林務部長、黒田場長、村上道木協副会長らが向って右側に着席。幕があがると、アナウンサーの司会のうちに、まず黒田場長が開式のことばを述べ、つづいて横田副知事の知事式辞、感謝状贈呈、来賓祝辞、祝電披露と式は進み、中

村副場長の閉式のことばをもって、予定の12時を少し廻ったころ、とどこおりなく記念式典を終わった。

記念式典が終ると、別に用意した控室で、来賓・招待者に折詰弁当を供し、午後1時から、同じ会場で記念講演会が開かれ、約220人の人々が熱心に聴講した。演題と講師および講演要旨は別項のとおり。

なお、開会にさきだち、主催者側を代表して中村副場長が、要旨つぎのあいさつを述べた。

「日本の伝統的文化を育ててきた木材は、現在でもその60～70%ほ建築用材に向けられ、日本人の生活とは切っても切れない関係を持った材料である。木材資源の量的・質的低下と代替材料の進出とは、木材の需要構造に大きな変化をもたらし、建築単位面積あたり木材使用率は低下しつつあるものの、木材が構造材料として占める位置は相変わらず高い。この意味で、わが国における木構造の理論と実際についての權威である沢田教授にご講演ねがうことは、きわめて意義が深い。

また、木材産業界はいまや重大な危機を迎え、国や道も種々の施策を講じて、業界とともに危機打開のための努力を重ねているが、木材産業界には中小企業が多く、規模の過小と企業数の過多が問題解決を困難にしている面もある。このときにあたり、政府のこれからの中小企業対策を中心に、小斎指導部長からお話を伺うことは、誠に時宜に適したものであろう。

さらに、70年代の成長産業は住宅産業だといわれ、建築業界はもとより、鉄鋼、不動産、金融などの大手

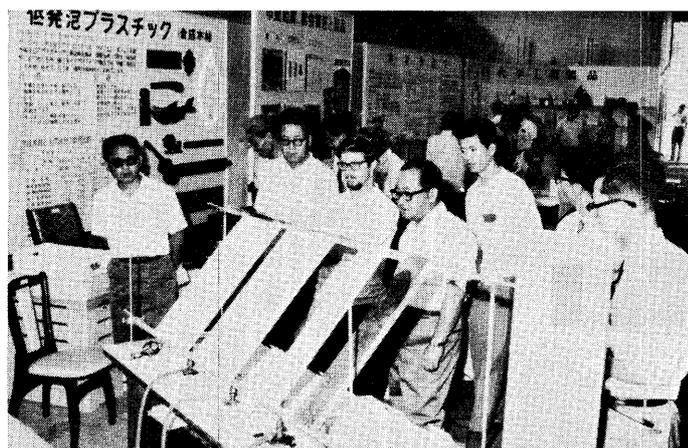
業者が、いずれもバスに乗り遅れまいと、そのシステム化に取り組んでいるが、住宅建築材料における主流を占めてきた木材が、はたして主導権を握る体制にあるかどうか、むしろ期待と不安のいりまじった気持ちで暗中模索というのが、木材業界の現状ではなからうか。この時機に、住宅産業に関して多くの著書を出され、アメリカの実情をつぶさに見てこられた鷲野新建材新聞編集長のご講演を承ることは、われわれに力強い示唆を与えるものと思う。

最後に、ご多用中にもかかわらずご快諾をいただいた三講師に対し、深甚の謝意を表する。」

また、別項の講演が終ったあと、真弓・記念行事協賛会々長が、講師に対する謝辞と、この講演会が総りのある成果をもたらすとを祈る旨を述べて閉会した。

一方、試験場構内には、職員総力をあげての飾りつけや、木工機械実演展出品メーカーによる機械の据えつけなど、準備万端ととのい、正門には大小長短の丸太を20本ばかり立てならべたシンボル・タワーが人目をひき、機械展出品各社の社旗が凧にはためくなかを、24日午前9時、会場に通じる道路上で職員や関係者が集まって開会式を行なった。黒田場長と機械展出品各社の代表3人が紅白のテープにハサミを入れると同時に、参列者が手に手に持った色とりどりの風船が離されて空に舞いあがり、五段雷が打ちあげられて、展示会の成功を祈った。

木工機械実演展は、試験場構内の製材、単板、合



板、調板、加工、繊維板およびパルプの各試験工場をそれぞれ順に第1から第7会場に区分し、ここに全国木工梯械工業会、日本機械鋸・刃物協会および日本輸入木工機械協会傘下の28社、92台の木工機械が据えつけられて実演展示された。会期中、式典当日を除いてまずまずの天気恵まれ、入場者も日一日と尻あがりにふえて、総数3,242人に達した。そのうち2,689人、全体の約83%

は、木材工業やなんらかの形で木材の加工に係る人々で、その点でもこの展示会は、おおむね所期の目的を達したものである。

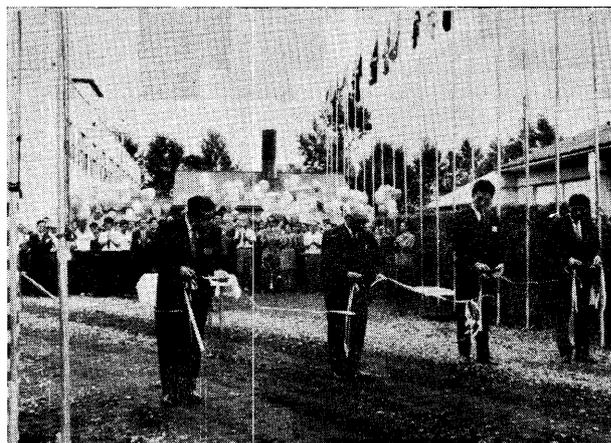
また、この実演展は、生産性の向上や省力化および高次加工にテーマをしぼり、機能的にこのテーマに合致していると考えられる機械を一堂に集めた。“木材の未来をひらく”というキャッチ・フレーズを冠したのもそのねらいからである。これは、質・量ともに低下しつつある道材のさらに高度な有効利用を図るとともに、現在構造改善事業を進めつつある本道木材工業界のこれからの進路に、なんらかの示唆を与えたいという念願からにほかならない。

木材のよさを改めて見直し、くらしのなかにもっと木材を生かして、その需要拡大と合理的な利用の途を追求することをねらいとして、くらしと木材展が、木工機械実演展と併行して同じ24日から1週間にわたって開かれた。

そのうち建材展は、試験場構内の成型木炭実験室の北西側空地、ちょうど昨44年度に新設した図書室の真向いにあたる場所に、エゾマツ彎曲集成材による三銃節山形ラーメンを軸組とし、外装にカラマツ合板を貼った間口9m、奥行8.1mの実験家屋を新しく建て、その内部に、部分的に縮小した7つのモデル・ルーム（玄関、応接室、ダイニング・キッチン、廊下、居間、和風客間および子供室）をつくり、各室ごとにその機能に応じた木質建材を実際に使って展示した。

なお、各室には、主として全国試験場作品展に出品された製品科学研究所の食卓セットをはじめ、千葉県工試のレディス・キャビネット、秋田県工試の児童用遊具、北海道工試の構成キャビネット、テーブル、ひじかけ椅子および旭川市工芸指導所の応接セット、座敷机などを期間中借用して配置し、錦上さらに花を添えることができた。そのほか富山県木材試験場からはウッド・タイル製造工程のサンプルを拝借して資料館に展示することができた。これらの物品の借用についてご決諾をいただいた各機関のご好意に対し、衷心より謝意を表する次第である。

このモデル・ルームの入場者は約2,300人を数え、

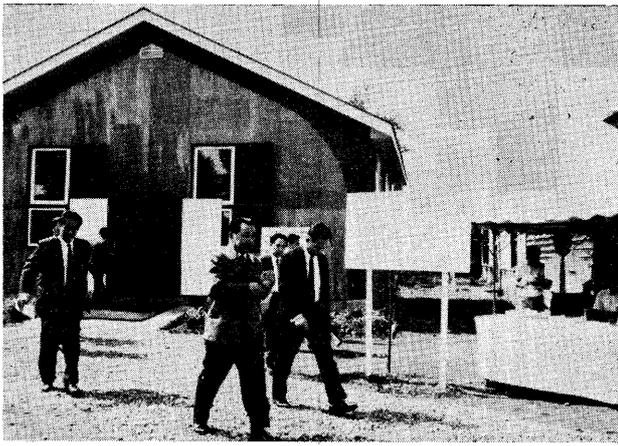


木材関係者ばかりでなく、建築業者や一般市民からも強い関心を寄せられ、会期が終って解体するのを惜しみ、木材のPRのためにも保存してほしいという声が強かったので、当分そのまま保存し、随時参観に供することになった。

木材化学製品展示会は、開発試験室を会場にして、木材の利用上の欠点を補うために当場の材産化学部が取組んでいるいろいろな化学的な改質処理についての説明、紙パルプ工業を含む木材化学工業製品および最近話題になっている低発泡プラスチック合成木材などの展示や紹介を行なった。

展示は木材化学工業製品、木材の改質、市販防腐防虫薬剤と製品、低発泡プラスチック合成木材、燃焼実験の5つのコーナーに分けて、木材の主要3成分からの化学工業製品、木材が本来もっている欠点に対する化学的な防腐、防虫、防火処理あるいはフェノール・プラスチック処理などを説明し、とくにこれからのびる新材料と目されるWPCについては、処理設備、価格などの質問が見学者からでて、注目の的となった。さらに木材腐朽菌、食害虫標本、被害材、これらに対する市販の処理薬剤、処理製品などが陳列され、木材を使う場合の参考に供した。

また、いわゆる合成木材のコーナーでは、木材とそっくりの型押し製品が展示され、その特長を生かした微細な木目周縁模様などは非常な興味を呼んだ。会場の一角では日に3回傾斜型方式による燃焼実験を行な



い、難燃合板の防火性能や當場で開発したリグニン・フォームの耐熱性をよく理解してもらった。連日多数の木材関係者および一般市民でにぎわい、会期中2,746人が会場を訪れた。

木工機械公開座談会は、8月28日(金)午後1時から、ニュー北海ホテル・4階ホールで「高次加工と生産性」をテーマに、110人が出席して開かれた。司会者と話題提供者はつぎのとおりで、話題提供者の色わけは、機械メーカーの立場とユーザーの立場からそれぞれ4人ずつという構成である。

司会者

日本木材加工技術協会 会長 農学博士
斎藤美鷲氏

話題提供者

全国木工機械工業会 技術委員会 委員長
谷尻正三氏
全国木工機械工業会 技術委員会 木工部会長
伊藤幸夫氏
日本輸入木工機械協会 会長

村井徳三氏

中小企業近代化審議会 専門委員

坂井秀春氏

北海道製材工業協同組合 理事長

村上彦二氏

北海道木材林産協同組合連合会 副会長

菊地直義氏

株岩倉組常務取締役

会田徹氏

伊藤組木材株式会社 工場長

沢野信一氏

この顔ぶれを見ると、わが国におけるそれぞれの分野での当代一流の人物で、この種の座談会では、現在望み得るベスト・メンバーであった。

まず司会者からあいさつのあと、住宅用建材生産の方向、生産性や付加価値の向上に適する機械の生産、省力化を基礎に自動化専用機械化の傾向、木工従事者の災害防止、最近の公害問題に関連する騒音防止の問題、輸入機械の導入など、テーマにふさわしい話題が提供され、メーカー側とユーザー側との間に活発なやりとりがあり、また聴講者との間に質疑応答があった。盛会のうちに午後5時ごろ閉会した。

この座談会を通じて感じられたことは、機械メーカーとユーザーとのコミュニケーションの交流がいかに大切であるかということ、従来とくに北海道の木材業界との間に、このコミュニケーションの機会がいかに少なかったかということ、その意味でこの座談会は木工機械実演展を含めて、大きな刺戟となったものと思う。

なお、以上の諸行事のうち、木工機械実演展、木工機械公開座談会およびくらしと木材展の詳細については、次号に紹介する。

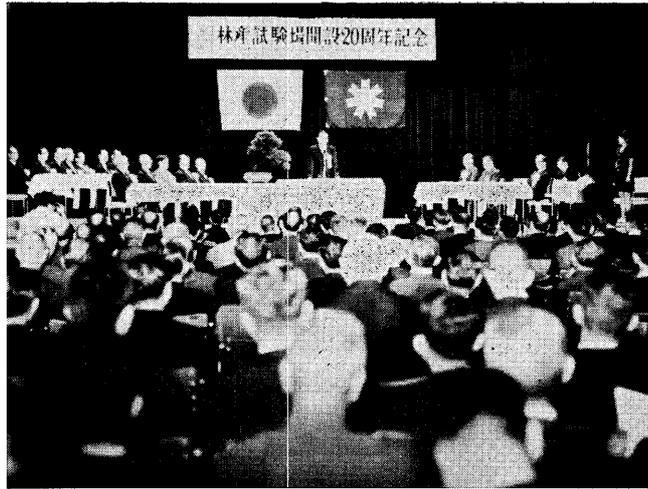
記念式典

とき 昭和45年8月27日
ところ 旭川市拓銀ビル8階

式典順序

1. スライド映写「林産試験場の20年」
2. 式典

- 1)開会のことば
場長 長
- 2)式
辞 北海道知事
- 3)感謝状贈呈
元旭川市長
前野与三吉 殿
日本木材加工技術協会
会長 斉藤美鶯 殿
東京教育大学教授
小林達吉 殿
北海道木材協会理事長
小林庸秀 殿
北海道林産技術普及協会
会長 真弓政久 殿
- 4)来賓祝辞
林野庁長官 殿
中小企業庁長官 殿
農林省林業試験場長 殿
工業技術院製品科学研究所長 殿
北海道議会議長 殿
旭川市長 殿
北海道木材協会
会長
- 5)祝電披露
- 6)閉式のことば
副場長



開式のことば

場長 黒田 一郎

本日ここに林産試験場の開設20周年の記念行事を行なうに当り、開式のことばをかねて一言お礼のご挨拶を申し上げます。

本日は、ご多用の折、日頃格別のご配慮にあづかりおります中央諸官庁の長官をはじめ、当場の日常活動に対し、つねに暖かいご支援をたまわりおります来賓各位のご臨席のもとに、この式典を挙行いたしますことは、当場にとりまして誠に光栄であり、感激するところであります。ありがたくお礼申し上げます。

当場は昭和25年の8月、北海道立林業指導所の名称をもって、北海道の森林資源の高度利用開発と木材産業の振興発展をはかる公共的使命を帯び、当地旭川に業務をひらきましてから、今年で満20年の歳月が経過したことになります。この間における当機関の歩みはスライド映写をもって、ご紹介申し上げたとおりであります。

そこでこれからの当場の長い発展を考えますとき、これまでの20年間は誠に貴重な最も記念すべき時代であったというわれわれの自覚から、このたび記念事業の一つとして「林産試験場の20年」と題する年史を刊行いたしました。これは単に過去の歴史を回顧するためのものではなく、当場の将来の発展に役立たせようという考えから、20年間の活動の記録をとりまとめ

たものであります。この編集に当りましては、町村北海道知事の激励のおことばを拝し、また機関の創設と、運営の基礎づくりをされました諸先輩の貴重な玉稿をたまわり、さらに表紙には北海道科学技術審議会会長であり、前北大学長の杉野目先生の題字をもって飾ることができましたことは、私どものこの上もない大きな喜びであります。場員を代表いたしまして各位に厚くお礼申し上げます。どうかご来賓の皆様方におかれては、従来にもまして、これからも力強いご支援をたまわりますよう、切にお願い申し上げて開式のことばといたします。

式 辞

道立林産試験場開設20周年記念式典を挙げるにあたり一言ご挨拶を申し上げます。

当試験場は昭和25年8月に開設され、以来製材の二次加工、道材合板の生産技術の改善、木材の保存性の向上あるいは低質材の経済的利用と木材産業の発展に寄与する一連の技術開発研究ならびに普及指導を通じまして、本道はもとよりさらに広くわが国林産工業の発展に貢献してまいりましたことは、誠に同慶にたえない所であります。関係者のご努力ご協力に対し、改めて深く感謝の敬意を表するところでございます。

ご承知のとおり、本道の木材産業は、開拓の初期からめぐまれた森林資源と林産業関係者のたゆみないご努力によりまして、本道の基幹産業として、本道はもとより、わが国の産業経済の発展に寄与してまいりましたのでございます。しかし、ご承知のとおり、今日におきましては、戦時中の過伐、さらには前後におきます風害等に災いされまして、木材の需給は量、質ともに不均衡が顕著となりつつあり、道といたしましてもこれらに対処するため、林道、造林等生産基盤の整備を行なうなど森林資源の潜在能力の開発に努める所存でございますが、現実には増大する木材需要に対し、木材供給力は低下し、森林王国といわれる北海道すら外材にその一部を依存している実情でございます。本道の林産工業は、これら資源的内容ならびに需要動向の変化に対処いたしまして、生産技術の開発による体質

の強化が何よりも緊要であり、道といたしましても、これまで林産業に対し、種々の施策を講じてきましたが、昭和46年度を初年度とする第3期総合開発計画の重要施策の一環として、とくに林産業振興対策をかげ、明年度からこれが推進に全力をつくして行く所存でございます。しかし、その対策の基本的なこととして、試験研究機関の技術開発ならびに指導に対します関係業界の期待は誠に大きいものがあるといわねばなりません。

林産試験場が今日の記念すべき日を契機といたしまして、これまで20年間の業績を礎とされ、さらに今後一層研鑽を重ね、その使命を達成することを心から期待いたしますのでございます。

おわりに本日ご臨席各位の今後のご指導、ご協力をお願いし、式辞といたします。

(代読北海道副知事 横田 長光)

祝 辞

林野庁長官 松本 守雄

本日ここに北海道立林産試験場の開設20周年の記念式典を挙行せられるにあたり、お祝いを申し上げる機会を得ましたことは、私の最も喜びとするところであります。

北海道立林産試験場が、昭和25年8月に開設されてからまさに20年の歳月が経過いたしました。現在までに30有余の特許権をはじめ、実用新案、意匠権など数多くの研究成果が生まれておりますことは周知のとおりであります。申し上げるまでもなく貴場は北海道における林産資源の高度利用の研究開発はもとより、地域産業に密着した、林産技術の普及指導をも重要な使命としておられますが、そのために、基礎的研究だけではなく、実用のための企業性の検討をも行ない、さらに北海道林産業の発展の指標としてつねに林産業界の指導にあたられ、わが国林産加工技術水準の向上に貢献されましたご努力とご功績に対して心から敬意を表するものであります。

最近における急激な経済成長は、いろいろな面にお

いて複雑な商品競争を起しており、林産業界がこの情勢におくれをとらぬために解決しなければならない多くの課題が山積しておりますことは御承知のとおりでございます。また経済成長の影にかくれてとかく忘れがちであった住宅環境改善の問題につきましても、その解決には真剣な努力が求められてくることと思われま

す。かかる情勢の時に、貴林産試験場が、針葉樹製材の高次加工、カラマツの特殊加工などについて地道な普及指導を続けておられること、またリグニン樹脂の利用による断熱材および軽量難燃合板の開発、さらには道産広葉樹合板の木目の美しさの強調のための技術の開発等々に努力されておられますことは、情勢に即応する林産業界の発展のために誠に時宜を得たものと存ずる次第であります。また長い研究期間とめざましい技術の開発を通じまして、日本全国はもとより世界の各地にも貴試験場の存在が、黒田場長始めスタッフの方々の名とともに注目されていることは、まことにご同慶にたえません。

今後とも道林産業界の振興のため、広くはわが国林産業界発展のためご努力を重ねられまして、より輝かしい成果をあげていただきますことを心から祈念いたしましてご祝辞といたします。

(代読札幌営林局長 手束 羔一)

中小企業庁長官 吉 光 久

このたび、北海道立林産試験場創立20周年を迎え、盛大に記念式典が挙行されるにあたり、一言お祝いの言葉を申し述べる機会を得ましたことは喜びに耐えま

せん。ご承知のとおり中小企業はわが国経済のなかで大きな比重を占め、重要な役割を果たしてまいりましたが、今後もこれまでもまして経済の各分野で成長発展が期待されております。しかしながら、中小企業はいまだ従来からの様々な問題点を残しており、一方労働力不足の深刻化、国際競争の激化、さらに急激に進行している公害問題等かって経験したことのない急激な環境の変化に直面しております。こうした環境の変化に

適応し、大きく開ける未来へ向って成長発展を期するためには、中小企業は創意工夫をこらし、高度の技術と高い生産性を有する企業へと脱皮を図ることが肝要であります。この意味におきまして、技術の向上は、中小企業が今後の経済社会に適応し、発展して行くための基本的な方策であると考えられます。

このような時にあたり中小企業に対する技術指導ならびに試験研究の第一線を担当される公設試験研究機関の果たす役割は誠に大きなものがあります。

貴試験場は、終戦後間もない昭和22年に設立されて以来、20年にわたって木材・木工に関する総合的な研究、指導を通じて北海道産業の技術水準の向上に大きく貢献してこられました。これは北海道ご当局、試験場の皆様方のご尽力のたまものと深く敬意を表する次第であります。

政府といたしましては、従来にもまして中小企業の近代化を積極的に推進するため、技術開発や技術指導をはじめとする技術対策を拡充してまいり所存ですが、貴試験場におかれましては本日の栄えある記念式典を契機として中小企業の振興と地域産業の発展のためさらにご尽力されるよう切望してやみません。

最後に貴試験場ならびにご当地業界の一層のご発展をお祈りして私のお祝いの言葉といたします。

(代読中小企業庁指導部長 小齊 弘)

農林省林業試験場長 竹 原 秀 雄

本日ここに北海道立林産試験場開設20周年の記念式典を挙行されるにあたり、関係各位多数ご出席のもとに一言ご祝辞を申し述べる機会をえましたことは、私のもっとも喜びとするところであります。

かえりみまずに昭和22年林政統一を契機といたしまして国立研究機関の統合整備が行なわれるにあたり、当時野幌ならびに豊平の林産研究部門は目黒に集中されることになりました。北海道ご当局ならびに関係の各位は、この事態を深く憂慮され、ただちに、道独自の研究機関をもつべきであると結論されまして、昭和25年、本道林産工業の中心地である当旭川市に林業指導所が呱呱の声を挙げたことは、なお私どもの記憶に

新たなところでございます。

爾来20年間、この間に貴場で挙げられた輝かしい業績は枚挙にいとまのないほどでありまして、林産研究の各分野にわたって多くの成果を収め、優れた技術を開発し、北海道の林産業界に多大の貢献を行ない、つねに本道林産工業の技術的な中心としての位置を占めて来られたことは周知のとおりでございます。この間、貴場が道内業界の技術的水準を高めるために払われた努力は並々ならぬものがあり、ひとしく識者の認めるところであり、その経過は発行以来220号におよぶ林産試験場月報にその足跡の一端をたどることができます。いうまでもなく、貴林産試験場は道内における地域産業に密着した林産技術の開発研究がその使命であると存じますが、このためには基礎的研究から一歩前進して中間工業試験を実施し企業性の検討も行う必要があります。この種の実用的成果に直接つながる応用ならびに開発研究は、研究のなかでも最も困難の伴う分野であり、いくたの制約された条件のもとにすめられなければならないのであります。しかるに貴場は、設立の当初からこれらの使命と責任を充分認識され、種々の障害をよく克服されて今日の姿に発展されましたことは、誠に同慶に堪えないところであり、場長はじめ場員各位のご努力に対しまして心から敬意を表する次第であります。

いまやわが国の林業はかつてない大きな転換期に直面しており、この正常な発展のためには解決すべき多くの問題をかかえていることはご承知のとおりであります。

戦後、木材需給のいちじるしいアンバランスのもとで生産量の増大のための施策として拡大造林の計画や短伐期樹種の選択が行なわれておりますが、この結果は今日の需要面の要請に必ずしも対応せず、多くの用途で外材や非木質系材料と国産材との競合がはじまっております。これらの競合のなかで国産材の需要を安定的に拡大することが、わが国の林業問題の解決につながる一つの道であります。このためには国産材の利用面での技術研究の推進が不可欠の要件とされております。このため国立林業試験場としては今後とも必

要な林産研究の推進を一段とはかっていく所存でありませんが、このような時に貴林産試験場の存在は誠に心強く思われるのでありまして、今後とも密接な協調のもとに、相ともに林業・林産業の発展のために進まれることを希望するものであります。

過ぎしこの20年の歳月をかえりみ、道ご当局の深いご理解にもとまらずご処置と、それにこたえて立派な業績をつみあげてこられた試験場のご努力に、心から敬意を表する次第でございます。今後はさらに場員各位が思いを新たにし一層その責務の重大なることを自覚され、ますます立派な成果を挙げられ業務に精進されることを期待するものであります。

本日の記念すべき佳き日に当り、貴試験場の輝かしい前途を祝福し一言蕪辞を述べて祝辞といたします。

(代読農林省林業試験場調査部長 加納 孟)

工業技術院製品科学研究所長 赤川 直 亮

新涼の候、大自然の景観につつまれて北海道立林産試験場は開設20周年を迎えられ、栄ある記念式典を挙行されるに当り、列席する機会を得ましたことは誠に慶びにたえません。

わが国の木材資源が産業の飛躍的發展に伴い、ようやく枯渇しつつある情勢のなかで北海道はいわゆる道材でなじまれた有用材の宝庫として木材工業にとってますます貴重な存在になっております。道立林産試験場がこの資源の中心たる旭川の地に開設されて以来、林産技術センターとして林産行政の推進、林産工業の振興につねに先導的役割を果たし、木材資源の高度利用と産業技術の研究、指導にめざましい成果をあげられましたことは周知のことであり、北海道は申すにおよばず、わが国林産界に対する大きな貢献として高く評価されております。広大な敷地と高度な研究施設に加えて、優秀な人材を多数擁するその内容と実績は、北海道ならびに試験場ご当局の並々ならぬ熱意の賜と敬服いたしており、貴場に対する産業界の今後の期待もきわめて大きいものと信じます。

住宅産業の飛躍的發展が予測され、また住宅の質的向上がいわれる今日。木材の尚一層の高度利用技術や

住宅材料の研究などを含めて林産工業分野の研究課題は山積しており、貴試験場の使命はますます重要なものになっております。

貴試験場がこの祝典を新たな起点として1970年代の使命達成に邁進されることを期待し、そのご発展を祈って祝辞といたします。

北海道議会議長 佐々木 利雄

本日ここに北海道立林産試験場の開設20周年記念式典を挙行せられるにあたり、一言お祝いを申しあげます。

昭和25年8月、北海道立林業指導所として発足以来20年間、低質材の利用開発をはじめ、紙パルプを除く木材工業のあらゆる分野において、生産技術の改善に関する試験研究と技術者および技能者養成のための普及指導活動に貴試験場が果たした役割は大きく、道内はもとより、国の内外からその成果を高く評価されておりますことは誠に同慶にたえないところであります。これもひとえに知事をはじめ道幹部の適切なご指導と歴代場長をはじめ職員各位のなみなみならぬご努力によるものと深く敬意を表する次第であります。

いまや本道林産業界は、道内森林資源の質的および量的低下、その他の要因により重大な危機に直面し、その体質改善を迫られております。この危機を打開するため林産業界が挙げて真剣な努力を払っておられることは当然であります。道は製材業構造改善事業をはじめとする諸施策を講じ、道議会もまた、これを促進しているところであります。これらの施策がさらに実効を奏するためには、貴試験場の研究成果が速やかに林産業界に反映し、その生産技術の改善に役立つことが肝要であり、この意味において、貴試験場の今後の活動に、一層大きな期待が寄せられているのであります。

本日の式典を契機に、貴試験場がさらに一段の飛躍を遂げ、ますます発展せられることを祈って祝辞といたします。

(代読北海道議会議員文教林務委員長 高田 治郎)

旭川市長 五十嵐 広三

今日、道立林産試験場が、創立20周年を迎えられたことを、ことに地元の30万市民をはじめ、道北住民といたしまして、心からお祝いを申しあげたいと思う次第であります。

20年前大きな役割りを背負って誕生し、当時の田中知事そして町村知事と、両知事の非常に情熱的なご努力をはじめといたしまして、歴代の場長、あるいは場員の皆様方、関係者のご努力が積み重ねられて、今日私ども旭川市民、道民として、全国に誇る施設に相なりましたことは、ほんとうに喜ばしいことであり、またご努力を続けられました関係者の皆様に心から敬意を表したいと思う次第であります。

先日、東海大学の工芸短大を旭川に誘致する考えをもちまして、松前総長をはじめ、関係者の方々にいろいろ陳情させていただいたおり、この旭川の関連諸施設および諸先生の陣容などを資料としてみせて欲しいということで、私どもはそれらの資料を整えてごらんに入れたのであります。そのおりに東海大学の皆様は、旭川に実に立派な施設があることに驚いておられました。私はここぞとばかり盛んにPRさせていただいたのであります。この東海大学は、つい先日起工式をあげまして、いよいよ明年の開校をめざして、建設が開始されているわけですが、これも全くひとえに当市に林産試験場があったことが非常に大きな誘致の要因になったのでありまして、私どもその面でも本当に心強く思い、感謝を申しあげたいと思う次第であります。

当市の産業は、出荷額およそ700億ほどの工業生産がありますが、そのうちパルプを含めて約60%が木材関連の企業によるものであります。木工などにいたしましても、全国四大木工主産地の一つに旭川になっており、また本道でただ一つの重要木工団地の指定をいただいていることも、20年の林産試験場の歴史が作ってくれたと思うのであります。

70年代はいわば住宅関連の企業の時代だといわれております。この新しい時代に入り、ますます林産試験場のもつ役割、使命というものは、重く大きなものになってきていると思います。

どうかこの20周年を契機として、知事をはじめ場長、各位の一層のご努力をお願い申しあげまして、ますます本道の林産関係企業の発展に寄与せられますよう期待いたします。

あたらめて20周年を心から市民とともにお祝い申しあげ、私のごあいさつにかえる次第であります。

北海道木材協会会長 岩倉 春次

戦後四半世紀の年月は、あの荒廃の国土から、わが国を自由世界第2位の経済大国に発展させました。この発展には、基幹産業の躍進が大きく寄与していますが、同時に産業全体の着実な伸張が基礎となっていることを忘れてはならないと思います。むしろ、これらの産業、とりわけこれらの産業のために、日々進歩しつづける技術を提供してきた試験研究機関の努力と成果を大きく評価する必要があります。

わが国の経済はさらに発展を続けていくことが期待されておりますし、本道においても開道2世紀の発展はめざましいものがあります。そしてそれらの発展を規定することは、試験研究機関の不断の努力にあることは

いうをまたないところであります。今後の産業が単なる技術開発ばかりでなく、よりシステム化された技術の開発を期待しているだけに、これら試験研究機関の前途にはますます多くの課題があるといえましょう。このような時代背景のなかにあつて北海道立林産試験場が創立満20年を迎えられたことは、まことに意義深いものと考えます。

全国唯一の業界に密着した技術の開発と普及を目的としたユニークな産業研究所としてこれまで果たしてきた役割は、業界のみならず他業界においても注目を集めていることはご承知のとおりであります。

1970年代は、日本の経済にとつても本道の経済ひいては木材業界にとつても、新たな試練を課せられており、それと同時に、新たな飛躍が期待されている意味で、いわば日本産業革命期ともいふべき時代といえます。この時代をきりひらくのは、まさしく人間の英知であり、この英知と努力によって新しい展望が開けるものといえるのであります。

創立20周年という記念すべきときにあたりまして、林産試験場の各位は、これまでの困難な時代に、道の内外を問わずいくたの研究成果と優秀な人材を世におくり出してきた実績をもとにして、さらに研鑽とご努

感謝状贈呈

前野 与三吉 殿

北海道立林産試験場の開設に際し、地元市長として卓越した行政力をもってその基盤確立に尽力された功績

斉藤 実 鶯 殿

豊富な識見と熱意を傾けて、研究体制の整備に協力され、林産試験場の発展に貢献された功績

小林 達 吉 殿

開設以来深い学識と豊富な経験をもって、重要研究課題の指導にあたられ、その業績の向上に貢献された功績

小林 庸 秀 殿

開設以来高邁な達見と情熱を傾けて、研究体制の基礎がために貢献された功績

真弓 政 久 殿

本道における木材業界の先達として、林産試験場の発展に貢献された功績

力を重ねられるよう期待し、魅力ある木材業界を実現し、確固たる未来を開かれるよう切望しまして祝辞といたします。

(代読北海道木材協会副会長 加賀 正司)

閉式のことば

副場長 中村 幸雄

本日は残暑まだきびしい折から、ご多用中にもかかわらず多数来賓各位のご出席をたまり誠ありがとうございます。おかげをもちまして、この意義ある式典をとどこおりなく終ることができ、厚くお礼申し上げます。われわれ林産試験場職員一同は、今後なお一層努力と研鑽を重ね皆様方のご期待に添いたいと存ずる次第でございます。なお一層の暖かいご支援とご鞭撻をたまわよう、心からお願い申し上げます。

この式典をはじめ、行事一切に閉じ、開設20周年記念協賛会の役員の方々はもとより、関係各位のご懇篤なるご配慮と絶大なご協力をいただきました。この機会にご報告かたがた、あらためて厚くお礼申し上げ、ここに北海道立林産試験場開設20周年記念式典を終わります。